
探偵店長

夢咲有貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探偵店長

【Nコード】

N5691Z

【作者名】

夢咲有貴

【あらすじ】

日本は戦争に負け疲れきっていた。

町は壊れ、戦争時に使用された銃等が一部出回っている。

戦争の被害をあまり受けなかった町もあった。

とある町の一角に喫茶店がある。

喫茶店の店長を勤める神村隆次は、ときどき店を休み他の仕事をしていた。

それは友人である探偵の茂森隼人の手伝いだ。

受けた依頼の謎は必ず解き明かすという噂ができ、いつしか神村は

探偵店長と呼ばれるようになった。

episode 1 (前書き)

半端な作品だと思いますんでアドバイス、感想貰えたら嬉しいです。

episode 1

「おい、姉ちゃんよー。これ、どーしてくれんだよ？」

テーブル席に座っていた三人の不良の内一人に、料理を出す際にウェイトレスが水を溢してしまい、不良のズボンに水をかけてしまった。

いや、正確にはウェイトレスが料理を出すのに合わせ、男が水の入ったコップを手のぶつかる位置に動かしてこぼさせたのだ。

「お客様、申し訳ありませんでした。」

不良達が大声で騒いでいるせいか回りの客たちは、こちらを見ていた。

「別に謝らなくてもいいんだよ。どーしてくれんのかって聞いてんだよ！」男は大声で怒鳴りテーブルを強く叩く。

店内は一瞬にして静まり返り、ウェイトレスは今にも泣きそうな顔を怯えていた。

店の奥からタバコをくわえた、黒髪で目付きの悪い男がズボンのポケットに左手を入れめんどくさそうに出てくる。

「お客様どういたしましたか？」

あくびをしながら言う。あきらかに謝る態度ではない。

そもそも、この状況を理解しているのかもわからない。

「神村店長、すみません。私が水を溢してしまいお客様のズボンを濡らしてしまっただんです。」

ウェイトレスは申し訳なさそうに答えた。

「店長さん、どーしてくれんだよ？」

「出ていけ。他の客の迷惑だ。そして何よりも俺の機嫌を損ねさせるな。」

謝るところか喧嘩を売り始めた。

回りの空気が一気に凍り、みな口を開いたまま呆然としていた。

「て、店長！」

ウェイトレスは我に帰って謝らず逆に喧嘩を売り始めた店長を止めようと叫ぶ。が、もう遅かったようだ。

「なめてんじゃねーぞ！」

男たちはテーブルを強く叩きその場に立ち上がり神村の胸ぐらを掴みかかり殴ろうとした。

しかし男の拳は神村の顔には当たらず、顔の前に出した手の中に収まっている。

手首を捻り足払いをすると男の体は空中に浮き、一回転して仰向けに倒された。

回りにいた人々は啞然とし、ただ立ち尽くす。

すると神村は腰に着けたポーチに手を伸ばし、ポーチの中から小型のリボルバー式の拳銃を取りだし倒れていた不良の額に拳銃を突きつける和不気味な笑顔をし喋り始める。

「言つたよな？出ていけと。」

神村は銃を突き付けたまま男の胸ぐらをつかみ、目をじっと見つめると男は急に息が荒くなり始め震えだし何かに怯えているように見える。

すると店の入り口が開き金髪の大学生くらいの男が入ってきた。

「神村、仕事持ってきたぞ！…取り込み中だったか？」

神村は男の耳元でささやく。

「お前命拾いをしたな。茂森、奥の部屋に來い。」

銃をポーチにしまい茂森と共に奥の部屋へと歩いていった。

episode 2

店の奥にある自室に茂森を入れるとやかんに水を入れ椅子に座った。「で、今回はどんな内容だ？」

茂森は適当に椅子に座り持ってきた封筒を黙って差し出す。中にはいくつかの資料が入っていた。

「高村葵？」

手に持った資料に書かれていた名前を読み上げた。

写真を見るとどう見ても高校生くらいだろう。

「今回は俺に何をしろと？」

「彼女の護衛をして欲しい。」

茂森はニコニコしながら一言いい、封筒の中に入っていた資料の一枚渡し依頼内容を説明し始める。

「この子が事務所に来たのが2日前。依頼内容は脅迫状の差出人の調査及び自分とその家族を守ってほしいそつだ。」

封筒の中で唯一折り畳まれていた紙を手渡す。

そこにはパソコンで打たれたと思われる字で、『私は決して忘れな
い、あの日のことを。高村久雄のしかした罪は、その命で償って
もらう。』と書かれていた。

まさに脅迫状だ。

「神村には高村葵の家に使用人としていつてほしい。」

さつきまでニコニコとふざけた顔をしていたが話を始めた茂森の顔は仕事人としての顔つきをしている。

しばらく黙りこみ、やかんのお湯が沸いたか確認するために立ち上がりコンロに近寄る。

やかんの口からは白い蒸気が吹き出していた。

カップを二つ用意しコーヒーを作り始めながら口を開く。

「わかった、その依頼引き受けよう。」

短く返事をする。カップにお湯を注ぎ軽く混ぜ茂森の前に置き、自

分のカップに砂糖を一杯入れかき混ぜ椅子に座り一口飲んだ。

「じゃ明後日から依頼人の家で働いてくれ。報酬はいつも通り振り込んでおくからな。」

ニコニコしながらそう言うとき茂森砂糖の入ったビンの蓋を開け砂糖を十杯も入れコーヒーを飲み始めた。

流石に入れすぎだろと思ったがなにも言わずコーヒーを飲み続ける。

「ごちそうさま。じゃ明後日のことで後で電話するから。またね。」
そう言うとき茂森は椅子から立ち上がり、封筒に資料をしまい自分の飲んだカップ台所に置きドアを開け帰っていった。

神村は黙ってコーヒーを飲み干すと茂森がコーヒーを飲んでいったカップと自分が使ったカップを洗い仕事に戻っていった。

仕事と言ってもほとんどなにもしていない。

あえて言うなら現場監督だろう。

店の閉店時間頃ポケットに入れてあった携帯が振動する。

着信は茂森からだった。

携帯を開き電話に出る。

「どーした？」

『明後日の事だが、十時に高村の家に行くことになったから九時にはそっちに車出迎えに行く。先に言っておくが普段みたいにキレイないでくれよ。仕事にならないからな。』

「わかってる。」

『それならいいんだが。じゃ明後日頼むな。』

そう言うとき茂森は電話を切った。

神村は電話の後店を閉め残った仕事をして自室へと戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5691z/>

探偵店長

2011年12月29日12時52分発行